

# 聞き手行動としての日本語あいづち表現の分析： 転記情報とコーディングによる発話連鎖パターンの認定

吉田悦子（三重大学人文学部）<sup>†</sup>

## Detecting Patterns of Sequences by Coding Scheme and Transcribed Utterance Information: An Analysis of Japanese Reactive Tokens as Non-primary Speaker's Role

Etsuko Yoshida (Faculty of Humanities, Law and Economics, Mie University)

### 1. はじめに

あいづちは、話し手が発話権を保持する状態で、聞き手が産出する表現形式であり、相手の話をきいていることを示すシグナルである。本稿では、狭義のあいづち表現（非言語形式を含まない）を対象に、日本語の地図課題対話の転記テキストを基にして、音声やピッチ等の情報を部分的に追加転記し、ムーブ(move)による構造 (Carletta et al.: 1997) を利用した機能分析をおこなう。このコーディングに従うと、あいづち表現は、典型的に認定(acknowledge)として一様に表記される傾向があることがわかる。この認定ムーブと他のムーブとのつながりを分析することで、発話連鎖のプロセスや相互行為の質的な違いを記述することが可能となる。その結果、あいづち表現が、どんなパターンの発話連鎖で出現し、対話進行においてどのような聞き手役割を演じているのかについて一定のパターンを明らかにすることができるのではないかと考えられる。本論では、先行研究の概観と対話データの概要および分析方法を示し、予備的な分析結果と分析例を示して、考察する。

### 2. あいづち表現の形式と機能

あいづち表現とは、「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現」(メイナード 1993 : 58) という定義を採用する。いわゆるあいづち詞として認定される言語形式は多様であり、「入出力制御系感動詞」として分類される (田窪・金水 1997)。英語、日本語、中国語のあいづち表現を比較した Clancy et al. (1996)では、'reactive token'という用語を導入し、backchannel を超えて表現形式を拡張し、backchannels、reactive expressions、collaborative finishes、repetitions、resumptive openers の5つのタイプに分類した。それぞれの頻度と会話分析的的手法により分析し、発話連鎖におけるあいづち表現の役割を検討している。<sup>1</sup> この分類を参照し、吉田・高梨・伝 (2009)におけるあいづち表現の認定基準および出現位置と形態の問題についての議論に基づき、Den et al.(2012)では、response tokens と名付けたあいづち表現について2段階のアノテーションを設定し、形態と直前の発話との関係性を分析、さらにあいづち表現を誘引する話し手の発話情報にも注目した。ここでの形式的分類は6タイプ (Responsive interjections, Expressive interjections, Lexical reactive expressions, Evaluative expressions, (Partial) repetitions, (Collaborative) completion) である。あいづち表現として利用される形式のうち、両者に共通している形式を含めると共に、本研究で扱う対話データが

---

<sup>†</sup>tantan@human.mie-u.ac.jp

<sup>1</sup> Gardner(2001)はこの分類を詳細に検討し、大浜・西村(2005)は日英それぞれの形式的分類について批判的な解説を加えている。

課題対話であることから、出現しにくいと考えられる形式を除き、以下の 4 つの形式を原則として採用する。なお、非言語形式のあいづち（うなずきや笑い）は含めない：

- (1) 「うん」「はい」「へえ」「そう」などのあいづち詞<sup>2</sup> および語彙的応答
- (2) 繰り返し（話し手の語句を反復する。部分反復を含む）
- (3) 言い換え（別の表現に言い換える）
- (4) 先取り発話（話し手の後続発話を、聞き手が先取って完結させる）

あいづち表現は、対話における分析の単位である発話の認定によっては、単位にも、発話断片（牧本、柏岡、キャンベル 2007; 伝ほか 2008）にも生起する。聞き手ターンとして独立している場合と話し手がターンを取っている間に重複して生起する場合もある。<sup>3</sup>

いずれにしても、あいづち表現は「聞き手行動」として位置づけられ、2 つのタイプの関連性について分析する。話し手への反応としての「聞き手的行動タイプ」と局所的に話し手役割を担う「話し手的行動タイプ」があると考えられる（伝 2009）<sup>4</sup>。課題遂行対話には達成すべき明確な対話目的があり、役割分担が明らかであるとはいえ、自然な発話に見られるのと類似の現象が認められ、特徴的なパターンを認めた上で、一般化することは可能であろう。

### 3. 対話データ

#### 3.1 対話データの概要

対話データとしては、地図課題対話による日本語と英語のパラレルコーパス各 8 対話が用意されているが、本稿では日本語 1 対話分について予備分析をおこなった。地図課題は 2 人の実験参加者により共同で達成される課題である。2 人の実験参加者に課される課題は、相手の地図が見えないように向かい合い、お互いに会話を交わしながら、情報提供者 (information giver: 以下 G と記載) の地図上の経路を情報追随者 (information follower: 以下 F と記載) の地図上に再現することである。なお、G の地図には経路以外に出発地点と目標地点、そしていくつかの目標物が描かれている。一方、F の地図には、出発地点と目標物だけが描かれており、目標地点と経路は描かれていない。2 つの地図は完全に同一ではなく、その違いについては課題の遂行過程で解決すべき問題の 1 つとされる（詳細については吉田 2002 を参照）。

#### 3.2 分析方法

この課題では話し手と聞き手の役割がかなり明確に区別されており、G を中心に対話が進行することが予測される。このため、聞き手の役割は G の情報を理解し、その進行を助け、自分の課題を達成することが期待される。課題の達成は両者にとっての対話目的であり、必要な情報は相互にやりとりされ、共有される。

---

<sup>2</sup> 話し手の後続発話を、聞き手があいづちで先取るような先取りあいづちもここに含める。ただし、「うんうん」という繰り返しは一回のあいづちとみなす。

<sup>3</sup> グラウンディング（基盤化）の形成において、あいづちの役割は、「対話の中で交換される情報が、対話参加者の間で共有されていく相互理解の形成過程」とみなされ、あいづちや繰り返しなどの対話調整機能の役割と機能が議論されている（Pickering and Garrod 2004）。

<sup>4</sup> あいづち表現による聞き手ターンは、発話権を取得しているとはみなさないで、あいづちの拡張としてとらえて差し支えないと考える。

今回、二つの分析方法でおこなう。まず、G と F それぞれの相互行為である「あいづち表現」について、2 で示したような4つの形式で分類する。次に、こうしたあいづち表現を介した語り手と聞き手とのやりとりがどのような交換パターンをとるかを観察するために、機能的側面をムーブ(moves)の連鎖から考察する。発話機能を分析する方法として、対話のムーブ構造 (Sinclair and Coulthard 1975、Sinclair and Coulthard 1992、石崎、伝 2001) を基盤とし、とくに、地図課題対話に特化した発話機能タグとして考案されたアノテーションであるムーブを考案したコーディングを利用する (Carletta et al.: 1997)。ムーブとは対話の局所的な構造をとらえ、ターンの下位分類として位置づけられる。ムーブには発話単位として統一された単位はなく、相互行為の基本的なユニットである conversational games を支える下位分類である。地図課題対話の場合、ムーブは initiation, response, preparation の3つのカテゴリーに分類され、以下のようにさらに下位分類される (Carletta et al.: 1997) :

The initiation moves (開始) の分類 :

- (1) Instruct move : 指示
- (2) Explain move : 説明
- (3) Align move : 次の発話に移ってよいか、説明に同意しているかを確認する質問
- (4) Check move : 発話内容や情報について確認する質問
- (5) Query-yn move : yes / no が答えになる質問 (yes, no が省略されていてもよい)
- (6) Query-w move : wh で始まる質問

The response move (応答) の分類 :

- (7) Acknowledge move : 理解したことを示す返答
- (8) Reply-y move : yes / no の質問に対する yes の返答
- (9) Reply-n move : yes / no の質問に対する no の返答
- (10) Reply-w move : yes / no の質問以外の質問に対する返答
- (11) Clarify move : ある種の質問に対する返答

The preparation move (準備) の分類 :

- (12) Ready move : dialogue game が終わり次の dialogue game の始まりを告げるもの

このうち、あいづちに関与するムーブは (7) の認定ムーブに該当する。このムーブは An ACKNOWLEDGE move is a verbal response which minimally shows that the speaker has heard the move to which it responds, and often also demonstrates that the move was understood and accepted.' (Carletta et al.: 1997) と定義され、次のような英語の事例が示されている。

- (1) G: Ehm. If you ... you're heading southwards. (Instruct)  
F: *Mhmm*. (Acknowledge)
- (2) G: Do you have a stone circle at the bottom? (Query-yn)  
F: No. (Reply-n)  
G: *No, you don't*. (Acknowledge)

(1) は指示に対する認定、(2) は否定の返答に対する認定および補足 (Follow-up) とみなされる。こうした認定ムーブは、いずれもあいづち表現としてみなすことができ、日本語においても観察される。

#### 4. 分析結果

まず、図1のように対話参与者別のあいづち表現の分布を見てみる。予想通り、Fのあいづち表現が優勢であり、Gのあいづち表現は全体の4分の1にとどまっている。表現の多様

さの点からも F は、40 例の繰り返しを使用し、言い換えと先取り発話を各 4 例使用している。

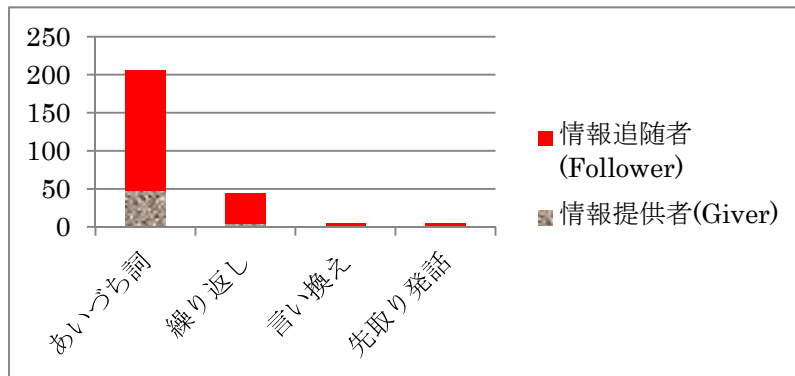


図1 対話参与者別のあいづち表現の分布

すでに述べたように、G と F の聞き手役割の比重から見れば、あいづち表現が F に多用されていることは当然の結果であるといえる。あいづち表現を実現する発話機能が認定ムーブであることは3.2で確認した。では、こうした認定ムーブはどんな発話連鎖において現れてくるのだろうか。Fのあいづち表現はどんな先行発話のあとに出現し、どんなムーブの連鎖が認められるだろうか。関連して、Gのあいづち表現はターンの交替とかかわるのか、その場合どんなムーブの連鎖が認められるだろうか。以下の分析例を見てみよう。<sup>5</sup>

(3)

- G:ここからあ<400+>ん<400+>もうすこしまだしたにいくんですけどお:,+ (Instruct)
- F:+はい (Acknowledge)
- G:まっすぐう<230>じゃなくて<400+>ちょっとだ<290>けかーぶするような
- さっ\*きからつずいていくと:, (Explain)
- F: \*ん<400+>ん (Acknowledge)
- G:ゆるやかなえすじ\*みたいになるぐらい:, (Explain)
- F: \*んっ (Acknowledge)
- G:\*えすまではいかないですけど:,+ (Explain)
- F:\*はい<400+>+はい (Acknowledge)
- G:まっすぐじゃなくて<400+>ちょっとだけかーぶしているかんじで:,+ (Explain)
- F:+はい (Acknowledge)
- G:もうすこしたのほうまで (Explain)
- F:っとこれはあのすたーとちてんからその一<310>\*つぎにいく (Check)
- G: \*はい (Acknowledge)
- F:ところまで:, (Check)
- G:はい (Acknowledge)
- F:あのせいかくにる一とをあのかかなかきやいけないんですか<400+> (Check)
- あの<400+>せん<400+>あ<400+>で:,わたしがはじめにいたところは:, (Explain)
- G:はい (Acknowledge)
- F:んっこれ<400+>おなじですよねかいてあるえは (Check)
- G:\*は:,

<sup>5</sup> コーパスの転記テキストは、千葉大学で開発された書き起こしツールにより作成されている。各発話単位は時間情報を利用して400ミリ秒以上のポーズにより区切られているが、紙面の都合上、この間を<400+>と記す。(2)の例のように<xxx>で示される数値は400ミリ秒未満のポーズの長さである。ムーブ認定できない部分は空欄としている。

F:*	どちらもち*	ず	(Explain)
G:	*ちがう-	{*ざっし[?]}	(Explain)
F:		*ちがう?	(Acknowledge)
F:		えすじで<330>*	なんか
G:		*えすえすまでい	かないんですけ*
F:		*んっうん<400+>	えつつぎに<300>せ
	んをひくところまで:		(Explain)
G:	はい+		(Acknowledge)
→F:	+なんか<400+>	つりばしみたい	に<400+>な
	G:あ	つつりばしは:	*そのすたーとちてんからみたら:
			*あ
→F:		*はい<400+>	
			*はい
→F:	*ひだり	っかわですよ*	ね
	G:*ほく<400+>		*ほくせい?<400+>
			ですよ

Gは指示ムーブで導入し、説明ムーブに移行する一方、Fはあいづち詞による認定ムーブのやりとりが続く(「指示/説明—認定」)が、この連鎖がとぎれるのは、Fの確認ムーブが始まるところである。Gはこれにあいづち詞で応え、「確認—認定」の連鎖がある。Fはこの後、説明ムーブに切り替え、Gとのやりとり(「説明—認定」)の後、確認ムーブを取り、Gは説明ムーブに戻る(「確認—説明」)。その後、Fはあいづち詞と先取り発話「ひだりっかわですよね」による認定ムーブに戻る(「説明—認定」)。

このように、Fは確認ムーブをきっかけとして説明ムーブに移行し、局所的な話し手行動を取っている。その間、Gは説明を中断し、あいづちによる認定ムーブを取り、局所的な聞き手の役割を演じている。指示ムーブや説明ムーブが先行する場合、その反応としてあいづちを誘う認定ムーブが出現しやすい。こうした連鎖は、対話が進行している印象を与えている。一方で、確認ムーブは、説明ムーブを要求すると同時に、話者交替のきっかけとして機能することも示唆された。この連鎖には、問題の所在を確認し、修復を試み、解決に向かおうという流れが認められる。そして、説明ムーブに納得できた時点で、認定ムーブが出現することになるだろう。

## 5. まとめ

本稿では、典型的に認定(acknowledge)ムーブとして表記されるあいづち表現について分類し、その発話機能について予備的な分析をおこない、他のムーブとの連鎖において考察した。ムーブの移行や、対話の進行や修復にかかわる発話連鎖のプロセスがなんらかの相互行為のパターンを成していることが垣間見えてきた。しかしながら、ムーブの認定自体が、形式だけで割り切れるものではなく、正確な分析にはより詳細な発話情報が必要である(指示と説明の区別)。異なるタイプのあいづち表現が、どんなパターンの発話連鎖で出現し、対話進行においてどのような聞き手役割を演じているのかについては、こうした発話情報なしには明らかにすることはできないだろう。転記方法とデータの解釈の問題も未解決であり、今後の課題としたい。

## 謝 辞

本研究は、科学研究費補助金基盤C「共参照関係を利用した対話プロセス研究と対話型言語教材の開発」(H22~24年度 課題番号2252039 研究代表者:吉田悦子)の一部である。本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化」(プロジェクトリーダー 伝康晴)の共同研究発表会での発表に基づき、内容を補足

追加した。グループリーダーおよびメンバーより有益なコメントを多く頂いた。ここに記して感謝する。

## 文 献

- Carletta, J., Isard, A., Isard, S., Kowtko, J.C., Doherty-Sneddon, G. and Anderson, A.H. (1997) 'The reliability of a dialogue structure coding scheme,' *Computational Linguistics*, 23, pp.13-31.
- Clancy,P.M., Thompson, S.A., Suzuki, R.,&Tao, H. (1996). 'The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin' . *Journal of Pragmatics*, 26, pp.355-387.
- 伝康晴、小磯花絵、丸山岳彦、前川喜久雄、高梨克也、榎本美香、吉田奈央. (2008) 「対話研究にふさわしい発話単位の認定に向けて」人工知能学会研究会資料, *SIG-SLUD-A802*, pp.27-32.
- 伝康晴 (2009) 「聞き手行動の認知科学に必要なもの」『認知科学』16 (4), pp.475-480. (Dec.2009)
- Den, Y., Koiso, H., Takanashi, K., & Yoshida, N. (2012). 'Annotation of response tokens and their triggering expressions in Japanese multi-party conversations'. In *Proceedings of the 8th Language Resources and Evaluation Conference (LREC 2012)* (pp. 1332-1337). Istanbul, Turkey.
- Gardner, R. (2001). *When listeners talk*. Amsterdam: John Benjamins.
- 石崎雅人・伝康晴(2001)『談話と対話』東京大学出版会
- 牧本慎平、柏岡秀紀、ニック・キャンベル(2007)「実対話コーパスに対する意味単位・構造情報のタグ付け」『言語処理学会第13回年次大会発表論文集』pp.764-767.
- 大浜るい子・西村史子 (2005) 「日英のターン交替と相づち使用の実相-日本人学生とニュージーランド学生の比較を通して-」『社会言語科学』第7巻第2号,pp.78-87.
- Pickering, Martin J. and Simon Garrod (2004) 'Toward a mechanistic psychology of dialogue,' *Behavioral and Brain Sciences*, 27, pp.169-226.
- 泉子・K・メイナード. (1993)『会話分析』くろしお出版.
- Sinclair, J. M. & Coulthard R. M. (1975). *Towards an Analysis of Discourse: The English Used by Teachers and Pupils*. Oxford University Press.
- Sinclair, J.McH. and Coulthard, R.M. (1992). 'Towards an analysis of discourse'. In R.M.Coulthard (ed.), *Advances in spoken discourse analysis* (pp.1-34). Routledge.
- 田窪行則。金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会 (編)『文法と音声』(pp.257-279). くろしお出版.
- 吉田悦子(2002)「日本語名称なし地図課題対話コーパスの概要と転記テキストの作成：報告」『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科研究紀要) 第19号, pp.241-249.
- 吉田奈央・高梨克也・伝康晴(2009)「対話におけるあいづち表現の認定とその問題点について」『言語処理学会第15回年次大会発表論文集』pp.430-433.